

入選

「永遠の0」

百田尚樹（講談社）

フードビジネス学科 田中沙織

この本を読んで一番強く感じたことは、「命は重い」ということです。主人公健太郎は、死んだ祖父の生涯を調べ始め、元戦友達の証言から、祖父が操縦の凄腕を持ちながら、同時に異常なまでに死を恐れ、生に執着する戦闘機乗りだったことを知ります。「生きて帰る」という妻との約束にこだわり続けた祖父は、なぜ特攻に志願したのか、元戦友達の証言から、さまざまな真実が明らかになっていきます。

「俺は絶対に特攻に志願しない。妻に生きて帰ると約束したからだ」これは、健太郎の祖父・宮部さんが言った台詞です。特攻することが良いことだと言われていた時代に、特攻は絶対しない、生きて帰ると堂々と言える人は、ほとんどいないと思います。戦争をしていた時代に、命は尊く、大切なものだと考え、その考えを貫き通そうとした宮部という人は、素晴らしい人だと思いました。また、宮部さんは、絶対に生きて帰ると信念を持っていました。しかし、毎日自分の仲間が死んでいく、自分より若い年代の人が死んでいく環境の中で過ごしているうちに、自分はこのままで本当にいいのか悩むようになりました。何度も何度も悩み、最後に出した真実がとても印象的でした。

私は、戦争というものを知らない世代の人に読んでほしいと思いました。この本では、戦争というものについて、詳しく深く書かれています。私は、この本を通じて、戦争というものはどういうものかを知り、興味を持ってもらいたいという作者の願いが込められていると感じました。簡単に命を手放してしまう人が多い今の時代を、少しでも変えたいと作者は考えたのだと思います。また、日本が戦争をしていた時代について、これからも語り継がなければならないと感じました。私は、「今」を必死で生きて、悔いのない人生を過ごしたいです。そして、今の時代の豊かさに甘えすぎないように生きていこうと強く思いました。